

階級も、その支配権やその私有財産を暴力の強制によらなければ放棄しないからである。

(四) 社会革命Ⅱ 権力獲得の過程

日本における来たるべき革命は国際資本主義および日本資本主義の客観的な諸矛盾によってその動向は決定される。戦争は政治の延長であると同様に社会革命と称する国内戦争もまた、政治的情勢の延長なのである。^(注14)

これは何人がそれを好むと好まないとに關せず不可避免的である。そしてわれわはこの革命において勝利者とならねばならぬし、またなり得るのである。労働者農民が勝利しない限り、資本主義は打ち倒されず、その限りにおいて社会革命は幾多の失敗を繰り返してもその目的を貫徹すべく起り来るからである。

社会革命は急激で全面的な武力的、組織的、イデオロギー的闘争の過程である。それは一方にはブルジョアジーとその追従者、他方には労働者農民と進歩的中産階級との対立およびその間における社会の支配の統制権を獲得せんとする闘争の過程である。私有制と社会化との間の闘争の過程である。勝利者はすべてを獲得し敗北者はすべてを失うところまで続けられる闘争の過程である。それはバリ・コンミュン、ロシア革命の歴史がこれを教えている。

社会革命は闘争なるが故にあらゆる強制化が最も無慈悲的に發揮されるのである。これは何人も回避することは出来ない。社会革命は国内的な戦争である。われわれがいかに強制を回避せんとしてもブルジョアジーはわれわれに強制を加えんとするものである。

強制をわれわれが受けないためにはわれわれ自身攻撃し、強制を加えなくてはならない。「攻势は最良の防禦」^(註15)なのである。ブルジョアジーが組織された暴力によって、すなわち政治的權力によって自己を防衛し、かつ労働者農民に圧迫を加えているのであるからこれを取り除くためには、われわれ自身を、より強固に防衛し、かつ攻撃し、彼らの政治的權力を破壊しなくてはならない。そのためにはわれわれ自身政治的權力を占有しなくてはならないのである。われわれ自身組織された暴力を行使しなくてはならないのだ。政治的權力はブルジョアジーがその權力から離

れた時さえ強力であることによってわれわれ自身把握する必要がある。それは國際的に結合した資本の強さ、その知識や、政治的技術において彼らが優れていること、私有制とブルジョアジーは全面的に經濟をわれわれがにぎる以外には再生産されること、これらの理由によって權力の把握は必要なのである。

かくしてのみ必然的に起こる反動を克服し、社会の中から一切の私有制、資本の残滓を清掃しアナキーへの一切の条件をつくり出すことが出来るのである。敵が近代武器を持っているのに対してわれわれが原始的な武器しか持たないならば、その勝敗は言うまでもなく明らかである。敵が組織された軍隊を持っているならばわれわれもまた、より組織された軍隊を持たねばならない。

戦争には一定の瞬間に決戦が行なわれ、その勝利には出来る限り敵より有力なだけ多数の軍隊を集結しなければならないし、有利な地点をば占領しなくてはならない。これは優れた司令官とそれに対する絶対の信頼と服従を誓った軍隊によってのみなし得ることである。日露戦争における両軍の軍隊を比較するならばこれは明らかである。

社会革命にも決戦が行なわれる。ロシア革命における十一月七日は一つの決戦であった。この日以来ロシア革命はその動向を一定の軌道に乗せたのであった。フランス革命における人權の宣言が発せられ貴族が自己の特権を放棄した七月一日は一つの決戦であった。その日以後は人權を疑う者はなくなったのである。

この決戦に味方の力を集結し得る者は、ただ各地における革命的闘争（収用と行政権の獲得）

を全体的に見透し得る位置にある者のみである。それは司令部の必要を示している。党とその優れた中央部のみがこの任務を果たし得るのである。

それ故に、われわれの戦略、戦術は政治的権力を武力的に獲得するためにそれ自身武装せる党の建設によってのみ始めて樹立されるのである。これなくしては強固なる国際的金融資本を打倒することは思うも及ばないことなのである。

これらのことはアナキズムの行動の方法に対する重大なる修正である。しかしわれわれはそれを敢えて発展と言うのである。なぜなら労働者農民がその金融資本との闘争においてかかる党とその活動を要求しているからである。それは左のごとき反対論に答えることによって示されるであらう。

われわれに対する第一の反対論は、われわれが人間社会の進化の動向が無政府的潮流にあると規定しながら無政府とは反対である政治的権力を自らとすることは矛盾ではないか？

第二のそれは、共産主義（ボルシェヴィキ）といかなる点において異なるか？

第一の反対論に答えよう。

われわれはすでにアナキキーがいかなる条件の下においても建設されるものではなく一定の条件の下にのみ建設され得ることを知ったのである。無政府的潮流とは個人の自由の出来る限りの拡大を要求する運動を、その具体的な形態は、あらゆる時代において異なるものではあるが、その異なる形のうちに貫く一つの傾向を名付けられたものなのである。近代アナキズムと称せらるる運動も時代によってその内容も、その行動の方法も異なって来た。ただ一貫せるものは個人の

自由、無政府の要求であった。ブルードンは民衆銀行を主張した。ステイルネルは自我主義者の独裁を強調した。バクーニンとクロボトキンも暴動が最良の手段であると提唱したことによって知られるのである。

われわれが暴力を用い、その暴力を最も強力なものたらしむるがために、組織的なものとし、すなわち政治権力を把握せんとすることは、単に物理学の法則を知るがためなのである。それは単に一個の手段でありアナキキーへの道を清掃すべき手段なのである。なぜなら、ブルジョア意識の浸潤せる現在、革命によって直ちに正しい方向を見出し得る者は少数者であるからなのだ。われわれはブルジョア意識や習慣を変革するために、執拗なる不屈なる闘争を繰り返さなくてはならない。それはわれわれが権力を握ってのみその方向を確立し、この闘争を戦い抜き得るのである。

われわれが政治的権力を把握することは国家社会主義者のごとくその政治的権力の永久化を求めるためではなく、それらを放棄せんがためである。われわれが政治的権力を握るのは全国における新しき自主的な経済建設を防御せんがためである。画一的な経済建設を廃して地方自治的なそしてその連合による経済の再組織をブルジョアの反動から防御するためなのである。

しからばわれわれが権力を把握した場合いかなる経済建設のプログラムを持つか？ それは一言にして言えば統制経済である。われわれはソヴェート連邦に見るものとは異なって生産手段の建設と「同時」に消費物の生産が主眼とされねばならない。無政府主義者は常に生産に参加する者のすべてに対して出来る限りの豊かな消費を保証すべく始めるのである。

それは労働者農民の地方的協議会によって立案された消費品およびそのための生産手段の生産の要求を基調とした全国協議会のプランによってなされるべき計画経済でなければならぬ。中央協議会によって立案された画一的プランの強制Ⅱ上からのⅡではなくむしろ逆に下からの要求による全国的プランの実施でなければならない。われわれの権力はこの経済再建のための闘争をブルジョアの反動の妨害から防衛するのである。

この下からの建設はわれわれのブルジョアの反動に対する勝利を何物にもまして支持するのである。そしてわれわれが反動を克服して行くに従って地方自治制は強化されて行くのである。かくして権力は地方自治制によって不必要となりかえって妨害とさえなる。この矛盾は地方自治制により「国家の廃棄」は実現される。国家権力はそれが不必要となっても、もしその「廃棄」を意図する人々によって把握されていない限りその永久化を企てるものである。実際に経済的自由の建設のみがその防衛のための権力を放棄せしめ得るのである。われわれの権力はその「廃棄」を準備する。だからわれわれの権力把握は決して無政府の潮流の反対とはならないのだ。

第二の反対論への答えの第一に、共産主義の具体的な闘争体たる共産党は今日においては国際共産党と離れ得ないところにある。これは決定的に重大なことである。

社会革命が勝利し得るには今日においては各国の状況を最も具体的に知り得る当該国の労働者農民の自主的な闘争と、その国際的自由連合によらなければならないのである。それは帝国主義国家におけるとその植民地におけるとまたは半植民地におけると、その闘争の方針が異ならねばならないからである。

人間は原始以来の習慣によってその行動を決定している。人間が民族的な対立を続けて来たことは古代からの習慣であった。それが国際主義に変替せられんとしているのは資本主義の持つ国際的情勢によってであった。しかし資本主義は民族的対立を含めているのである。

真に国際主義が開花するのは、国家的対立が消滅した時代においてのみである。このことはわれわれの運動が民族のあるいは国家的自主独立とその自由連合であることが最も現実的であり、革命的であることを示している。なぜなら未だ民族的偏見を持つ一般大衆にその偏見を失わしめるためには、その民族性に沿いつついかに民族間の対立よりもその自由連合が強力であることを示すことによってのみなし遂げられるからである。

フランス革命は外国軍隊と国王の通謀が暴露されるや民衆の憤激は燃え上がり老若男女を問わず民衆は外国に放逐せんとして革命的団結をつくりあげたのであった。ロシア革命においてレーニンはその党をロシア的に築き上げたことによって、すなわち公式的にはなくロシアの現実に沿った方法によって強力となり得たのである。

この民族的自主独立と国際的自由連合による労働者農民の階級的団結の主張はバクーニン以来、アナキズムの特徴であった。第一インターナショナルの諸記録はこの主張とマルクス派との闘争を記録している。

マルクス派の後継者たる共産党は国際共産党をつくり上げたのであったが、それは現実的に一つの特徴となった。

すなわち国際共産党と離れた各国共産党はあり得ないということである。しかるに現実には国際

共産党がロシア共産党を中心としていることによって多大の決定的な影響を受けていることを見失ってはならない。

ロシア共産党に関する限り党がソヴェート連邦の政治的、経済的現状に忠実であることをわれわれは少しも反対しないのである。しかしその事が直ちに国際共産党に反映し左右していることをわれわれは見逃さないものである。

それは次のことによつて明らかになった。各国共産党に対する指導が近年著しくソ連の国際連盟加入は各国共産党に尖鋭な闘争を展開せなくなつた。そしてそれが日本共産党の戦略戦術を決定しているのである。それ故にそれはロシア的現実の日本および諸国への押し付け以外の何物でもないのだ。(コミンテルンのやり方は、一国の東部と西部とが大抵の場合その政治的経済的状況においてはなほだしい違いはないということから一つの司令部を持つべきであるが、これを国際的に拡大したことに誤りがあつた)

これが日本共産党衰退の最も重大な原因であつた。独自の日本の特質を持たなかつた共産党は弾圧に会うとその多くの闘士をブルジョアの日本主義に後退せしめてしまつたのであつた。

マルクス、エンゲルス、レーニンによれば「ブルジョア国家は革命によつてプロレタリア国家に転化」し、プロレタリア国家は「死滅」するとされている。

アナーキー建設のための諸条件をつくり出すために「一時的に」権力を把握することは、その内容を問題にしない限りはわれわれもまたマルクス、エンゲルス、レーニンと同一である。だがその相違はプロレタリア国家およびそれが「死滅」するものか「廃棄」すべきものかという点に

ある。

レーニンによればプロレタリア国家は一国家(ある特定の階級の抑圧のための一つの特長なる力)からものではやすでに本質的には国家でないところのあるものへ「転化」したものであり、この抑圧する機関はここにおいてはすでに住民の多数であつて、奴隸、農奴、賃銀奴隷の時代にそうであつたごとくに住民の少数ではない。しかしもし人民の多数が自ら己の抑圧者を抑圧するならば一つの特長なる統治権力はもはやすでに必要でない。この意味において「国家は死滅し始める」とされている。

だが権力は何人が握らうとその国家は国家たるに変わりはなく特定の階級の抑圧のための権力なのである。

レーニンはその著『国家と革命』において、社会主義革命によるブルジョア国家の国家ならざるものへの、プロレタリア国家、すなわち半国家への転化およびプロレタリア国家の「死滅」に関する全理論を展開した。そしてこの二つの点はわれわれとレーニンとの決定的な対立点である。われわれはプロレタリア国家も国家たることに、すなわち「一つの特長なる抑圧のための権力」たることに変りはなく、この国家はその経済関係の漸次的発展に伴つて何時とはなしに「死滅」するものではなく、むしろその経済関係の発展に伴つて積極的に「廃棄」される時期に到達するものなのである。

われわれが革命的防衛のために権力把握を問題とし始めた今日においてもマルクス主義者と無政府主義者との相違は国家の「廃棄」か「死滅」かの点にある。マルクスの非難したようにわれ

われが革命に際して武器を放棄しようとするのではなくむしろその武器を一定の瞬間においては積極的に放棄するのである。

プロレタリア国家はブルジョア国家とは異なっている。だが、「階級的抑圧のための権力」たることにおいては、少しも異なっていないのだ。封建国家がブルジョア民主主義に転置されてブルジョア国家に転化したとはいえ、その国家は「抑圧のための権力」であった。ブルジョア民主主義が完全なる民主主義に転置されプロレタリア国家となろうと、それは「抑圧のための権力」なのである。プロレタリアは支配階級へ移り、かつて自己を抑圧したブルジョア階級を抑圧するのである。その目的が一は階級の存在のためであり、他は階級廃棄のためであらうが抑圧には変わりない。民主主義はそれがいかに完全なもの、人民に可能なる限りの政治的権力が与えられようととも国家の消滅とはなり得ない。民主主義は国家と共にあるのである。

人民の多数者が少数者に対して政治的、経済的優越を持つとはいかなる状態であらうか？ブルジョア民主主義は多数者の代表団体たる議会主義に代わって代弁される。だが議会主義がきわめて不完全な、だからプロレタリア民主主義の反対物であることは、ブルジョア階級が経済的に決定的に優越しているがためである。

ブルジョア民主主義は紙の上だけの仮面をかぶった多数者の少数者支配なのである。レーニンによればプロレタリア民主主義は事実における多数者の少数者に対する支配である。政治的権力は多数のプロレタリアにのみ与えられる。

プロレタリア独裁はその抑圧的権力をもって、ブルジョア、地主、中産階級のプロレタリア化

を促進する。全人民は一つの階級となり、それ故に階級対立は終わりをづけ、階級的抑圧は必要がなくなつて「死滅する」と言うのであるが、「抑圧の機関」は常に必然的に少数者に集中される。

いかなる権力も、経済的基礎なしに強制によろうと、自発によろうと大衆的支持なしには存在しないと同時に、その強化とその永久化運動を続ける。その強化は、ただ集中主義によつてのみなされるのである。それ故にプロレタリア国家は自らの権力の強化、少数者への集中、永久化の過程と、排除の実際的基礎としての経済的發展を含んでいるのである。

この矛盾は、唯漸進的發展＝全人民のプロレタリア化、単一階級化＝とその飛躍＝廃棄＝によつてのみ解決され得るのである。それはレーニンの言うごとく、漸進的發展によつて何時とはなしに「死滅」することによつて解決されるのではなく、むしろ支配者となる全人民の「廃棄」のための不断の闘争＝政治的、経済的、文化的、道徳的、社会的＝によつてのみ解決されるのである。飛躍なくして権力の消滅は絶対にあり得ない。

ソヴェート連邦の権力の永久化の過程は、レーニンの「一時的な国家」をスターリンの「確立された永き一時代」と規定する変化のうちに示されている。第二次五カ年計画の完成は国家「死滅」への第一歩と言いながら逆に国家機能は強化の途をたどっている。龐大なる新官僚群（かつてカウツキーが指摘した矛盾）、ゲ・ベ・ウ、常備軍の排除は決して自然的に習慣によつて就眠するものではなく、廃棄されてのみなされ得るのである。人に対する支配を事物の管理に移すことも漸進的發展と一定の瞬間における飛躍、すなわち廃棄を必要とする。

国家権力の排除の実際的基礎は、その経済建設の裡にある。それは全人民にその生活を保証せんとする方向を第一義に置くことである。これのみが反革命に対する最も経済的なかつ強力な防衛の方策である。これはあらゆる国における人民のうちにプロレタリアと農民が存在し、かつこの両者が同一に重要であること、すなわち被圧迫者の独裁がプロレタリアのヘゲモニーによってなされてはならず、プロレタリアと農民とを同一水準におくことによってのみ可能である。このことは地方協議会のプランの重視であり、全国的統制経済の計画がかかる基礎の上に立てられることを意味するのである。

かくして地方自治制への権力の分散は中央集権を廃棄することによって完了される。

このことは党に関しても言われる。それ故に第二の反対論の次の部分は党そのものに関してである。

(五) 党

大正十二年の関東大震災以来、日本の革命的党派は唯共産党唯一であるという観念が一般的になった。彼らはプロレタリアの党は唯一でありそれは共産党であると宣伝した。しかし共産党は衰退した。衰退の原因は幾多あげられるであろうが、唯一つ彼らが「日本」においては革命的党派たり得なかったところに真の原因があったのである。

帝国主義の時代においては、農村は未曾有の破滅に直面させられた。この時代においては労働者は農民と「より以上に」緊密に結合することなしには、敗北以外のいかなる結果をも持ち得ない。

マルクス主義の一特質であるプロレタリアのヘゲモニーという思想は社会民主主義とレーニンとによって二つの方向に区別されるに至った。社会民主主義者は資本主義の発展はブルジョアジーとプロレタリアートの二大階級に対立するに至るといふマルクスの思想から、資本主義の没落はかかる二大階級が対立し、闘争することによってのみなし得ると結論した。しかしこの理論は資本主義はブルジョアジーとプロレタリアートとの対立と同時に農民を全くプロレタリア化することも出来ないし、中間階級を不断に生産する事実によって誤りであることが明らかである。これに反してレーニンはマルクスの予想に反して、典型的な、そして工業の最も発達した資本主義国に革命の起こらなかった理由を、資本主義に対す革命は常に、世界資本主義の最弱の地点において爆発すると述べた。これはこの限りにおいて正しいのである。レーニンはかくしてロシアが一方には資本主義の集中の過程と、他の一方には地主による農民の農奴的隷従が結合したこと、そしてそれが革命的な力として絶対に必要なことを西欧のマルクス主義者に反対して主張したのであった。そしてこれもまた正しいのである。

労働者の解放は農民との結合なくしては絶対に不可能であり、農民の解放はまた労働者との結合を絶対に必要とする。レーニンはこれをプロレタリアートのヘゲモニーによる結合と規定した。この規定はプロレタリアートがそれ自身独立の階級であると決定したことによるのである。しかし資本家的支配の打倒は前述のごとく農民との結合なくしては、プロレタリアートのみにては決して出来ないのである。これは農民特に貧農および小農をプロレタリアートと同列の位置に高め

ることである。農民の革命に対する重大な役割はそのために、ただプロレタリアートの指導によって決定されるのではなく、農民自身が労働者と同一水準に立つて結合し得ることを示すのである。

資本主義は農民の犠牲によって発展したし、またするのである。最近における帝国主義は農民をほとんど全面的に破壊し去った。農村恐慌を含めた経済恐慌は世界的である。このことは農民を特に貧農および小農を決定的に金融資本と対立せしめるに至った。

貧農および小農は日常の生活改善のための闘争を単に、小作問題にとどめることは出来なくなつてしまつたのである。そして土地は次第に金融資本の手に歸した。今日では土地を誰が持つてゐるかが問題の中心となつた。支配階級はこれを都市と農村の対立に転化せんと企ててゐるのである。ファシストはこれを支持する。この転化を防止するためには農民が労働者と同一水準において結合してのみなし得るのである。ヘゲモニーの規定はファシストをして農村と都市との対立の強調を援助することにさえなつてゐる。

農民を被指導者と規定せんとしてマルクス主義は、ただ農民は生産者であるからブルジョアの方へもまたプロレタリアの方へも従属し得ると規定するのであるが、今日のごとく決定的な金融資本に対する貧農および小農の対立はこの規定を誤りとするのである。プロレタリアートの中でさへ買収される労働貴族は存在し、彼らこそ貧農および小農以上にプチブル的生活と意識とに浸潤されているのである。

われわれは労働者と貧農および小農の結合とその周囲に進歩的知識階級、下層中産階級、農村

においては中農をその予備軍として結集しなくてはならないのである。

かかる情勢は革命的党の新しい建設を要求する。かかる新しき党のみが、すなわち労働者農民を政治的権力の獲得に向かわしめ得るだけの果敢さとあらゆる革命途上における環境の複雑な状態において指導を誤らぬだけ充分な経験を持ち、目的に向かつてのすべての障害を排除するだけの充分な弾力性あるところの自ら武装せる党のみが労働者農民の革命的な階級的任務をはたし得るのである。かかる党なくして革命の勝利はあり得ない。かかる新しき党が無政府共産党である。

かかる党は如何なる特質を持つてゐるか？

党はまず第一に労働者農民の前衛でなければならない。党は労働者農民の最良の分子、その経験や、その革命的情熱や、労働者農民の問題に関する無条件の献心を統一してゐなくてはならぬし、また真実の前衛であるためには党は革命的理論や、行動の法則や革命の法則の知識をもつて武装してゐなくてはならない。レーニンの有名な言葉「革命的理論なくしては革命的行動はあり得ない」はわれわれにおいても真実である。それ以外に労働者農民を指導することは不可能である。党が労働者の要求を表示してゐるにとどまるならば、党が自然生長的な運動にとどまつてゐるならば、党が自然生長的な運動と政治的無関心を克服しないならば、党が労働者農民の一時的な利益の追求にのみとどまり大衆を階級的利益の高さまで高めることを理解しないならば、かかる党は決して革命的な党ではあり得ない。党は常に労働者農民に先行し労働者農民よりも先を見ることが出来、それ故に労働者農民を指導し得なくてはならないのである。かかる党のみが組合主義から労働者農民を引き離して独立の革命的な道へ進ませることが出来るのである。党はだか

ら労働者農民の政治的指導者である。

労働者農民の闘争の困難や複雑性、その攻撃と退却、その勝利と敗北戦術等において常に正しい方針を決定し、幾百万の労働者農民を正しい方向に向かわしめ得ると同様に、経験ある司令部を要するのである。党はかかる労働者農民の司令部である。前衛とはかかる司令部、政治的指導者のことである。

党は、単に前衛であるばかりでなく、その組織において労働者農民と密接に結合していなくてはならない。党は労働者農民の一部隊でなくてはならない。前衛と大衆と、党员と党外大衆との差異は労働者農民の全体が前衛の水準にまで高まり得ない資本家的支配の続く限り消滅し得ない。だが党が党外大衆と遊離し孤立するならば、党が党外大衆と結合せず、大衆が党の指導を拒否し、大衆の間に党の道徳的、政治的、軍事的信頼を保持していないならば、党は決して労働者農民を指導し得ないのである。党は労働者農民の不可分の一部とならねばならぬし、そうなのである。

党はある時期には労働者農民の全体を指導下に置かねばならず、出来るだけ緊密に結合していなくてはならぬ。このためには党は常に党外大衆を前衛の水準にまで高めるために闘争しなくてはならぬ。これは前衛の不断の義務である。

党が労働者農民の真実の指導者であるためには、党は労働者農民の組織部隊でなくてはならぬ。党はあらゆる困難なる事情の下においても、ゆるぎなき指導を続けるために、ある場合には大衆を革命的な攻撃にうつらしめ、ある場合には大衆を退却せしめ防禦にうつらしめることが出

来なくてはならない。これはただ党が未組織党外の幾百万の大衆に闘争における規律と計画、組織と忍耐の精神を不断に教え込んでのみなし得るのである。これはただ党自身が規律と組織の具体化であり労働者農民の組織部隊であつてのみ遂行し得るのである。これ以外に幾百万の大衆を指導するなどは全然不可能である。

そのために党は単なるグループの総計や同情者の集団であつてはならない。厳格なる党员の資格を決定していなくてはならない。党は私的グループの総計ではなく系統的な体系としての組織でなくてはならない。そこには上下の指導機関があり、少数者は多数者に服従し、実践上の決定はすべての党员に対して拘束的であればならぬ。かかる条件なしに組織的指導のための組織的全体としての党は出来ないものである。

かかる指導機関の存在や、かかる多数者への少数者の服従や、拘束的な決議の方法は大衆の要求をとらえ、それを階級的要求にまで高める事を決して拒否するものではない。それは党外大衆と結合しないならば党たることを止めるからである。

労働者農民は党以外に幾多の組織を持っている。そしてそれを持たずしては資本との闘争は行ない得ない。その組織はすなわち労働組合、農民組合、協同組合、消費組合、工場諸組織、婦人の同盟、文化的諸組織、青年の組織、議会内の諸分派、軍隊内の諸組織、代表者会議等々がそれである。これらの組織はある場合労働者農民の闘争に絶対に必要であるし、それなくしては資本との闘争は不可能であり、かつ労働者農民を革命的自覚にまで高め得るのはかかる組織によってなし得るのである。

だがこれらの組織は常に一つの方向に向かつてのみ活動しなくてはならない、そのための適当な連絡ある行動を決定し指導する中央組織が必要である。この一般の方針を決定する中央組織が党なのである。なぜなら党こそは労働者農民の最良分子の結合であり、その経営の集中的な結合であり、党外組織と直接に結合しており、その先頭に立っているからである。

また党はあらゆる組織を指導し得る職業的革命家を（それは労働者であらうと農民であらうとまた進歩的知識階級であらうと）養成し得るからである。党はまたその集中的な経験によってあらゆる組織を指導し党と党外組織と、大衆とを直接に結合し得るからである。

しかしこのことは党を党外組織と表面的に結び付けることではない。かかる機械的方法は全く誤りである。党があらゆる組織を指導下に置かねばならぬということはその組織の有力な一員である黨員をしてその党外組織の活動を党に近づけ、党の政治的指導下に活動し得るようにならざる説得の手段をとることを意味するのである。

それ故に党はあらゆる組織の活動の核心であり、かつあらねばならぬ。それ故に党は労働者農民の組織の核心である。しかしこのことは党がそれだけ充分に力があると考えるはならぬ。党はただ労働者農民の組織、未組織大衆と結合してのみ力を持ち得るからである。そしてこのあらゆる大衆闘争がある場合には一つの点に、又他の場合には他の一点に集中し得るためには党それ自身が鋼鉄のごとき規律をもってあらゆる組織より以上に強き規律をもって組織されていなくては不可能である。なぜなら鉄のごとき規律を持った党のみがあらゆるブルジョア的、小ブルジョアの意識の労働者農民への浸潤を破壊し、その流入を防止し真に革命的党として、その腐敗、その墮

落を防止し得るからである。そのみがあらゆる困難な事情の下においても大衆の間の革命的情熱を拍車付けるからである。党自身が弱い時にどうしてあらゆる最悪の事情を克服し得ようか！

鋼鉄のごとき規律ある党はただ党内に意志の統一があつてのみ可能である。あれやこれやの意見が紛糾している場合には断乎たる行動はとり得ないことは明かであらう。それは意志の無条件な統一を必要とする。しかしこれは党内の論争、下部組織の意見の上部組織への反映を不可能とすることでは決してない。むしろ鉄の規律はただ確信と自由意志による服従を前提としてのみ可能である。強制された服従は決して意識的な規律とはなり得ないし、それは決して鉄の規律とはなり得ない。活発な論争が終わり結論が述べられた時にはすべての黨員は意志と行動において統一されなくてはならぬことを意味するのである。

党は出来る限りの集中的な組織と軍事的な規律をもって組織され、黨員の信頼せる中央部が充分な権限と力を持っている時にのみ充分な活動が可能なのである。

これは明らかに分派の存在を許さないことである。なぜなら分派の存在は多くの中央部の存在を意味し、それは中央部の欠如、統一的意志の喪失を意味し、それは積極的闘争への裏切である。それ故に分派は明らかに労働者農民への裏切であり、支配階級への屈従を意味する。

かかる党のみが労働者農民の闘争をその政治的、軍事的中心として指導し得るし、労働者農民の権力を具体的に把握し得るのである。そしてそれはかかる権力、かかる党が常にその目的ではなく、一個の手段であることを深く認識してのみ労働者農民の解放のための闘争を具体的に指導し、具体的に自己批判し、正しきものを撰取し得るのである。それ故に党は無政府主義者の

党でなければならぬ。

(六) 何から始むべきか

いかなる人間を労働者農民の運動は要求しているか？
何から始めるべきか？

この二つの問題にわれわれは答えなくてはならぬ。第一にわれわれは革命的情熱と實際家的手腕とを一身に統一した人間が必要とされていることを知るべきである。この二つのものは、個々別々になっていてはその価値は全く減少してしまうことを知らねばならぬ。革命的情熱にのみ傾いている人は、労働者農民の運動の日常の目にもとまらないような、些細なそれでいて実にわずらわしく思われる出来事に対して後を向いてしまいがちである。この日常の些細な出来事に対して充分に熱心に関心し、直接に処理しなくては、前衛としての任務は決してたし得ないのである。労働者や農民は自分達に直接関係のある出来事ならきわめて些細なことまで熱心に協力してくれる者を信頼するのである。この日常の煩わしく思われるような活動を通じてのみ、われわれの説得は力を得、われわれの影響は拡大し、労働者や農民の一時的な利益が獲得され、それによって階級意識は目ざめて行くのである。革命的情熱は、だが怠惰や、保守主義に対しては有効である。それは古いものを破壊し新しいものを建設しようとするからである。だがそれは往々にして空虚な革命的な饒舌や空想的な設計病に堕つてしまう恐れがある。

これに対して、ただ實際的手腕のみを持てる者は、いかなる障害をも知らず一度やり出したこ

とはあらゆる實際的勇氣をもって征服して行く頑強な力を持っているのではあるが、往々にして革命的闘争の原則を喪失してしまつてその手段を目的であるかのごとく誤りがちである。

そこで確乎たる意志と、実践的な決心とを持ちかつ革命的情熱によってその見透しをつかんでいる人間、革命的情熱と實際的手腕とをかね持っている人間が必要なのである。われわれはかかる人間を自らきたえ上げなくてはならない。

第二にわれわれは何から始めるべきか？ これに対する原則的な答えは「革命家の組織」をつくることから一切の仕事は始めるべきであるということ、これである。一つの目標に向かって煽動宣伝を行なう場合には、まずその宣伝の中心となるべき革命家の組織をつくらねばならない。それを漠然たる労働者の組織から始めるならば、それは自然生長性への屈服であり、目的の喪失である。漠然たる、あるいは明確なる労働組合または組織をつくる仕事は当該目標に対する宣伝煽動の中心となる革命家の仕事なのである。

それ故に、われわれのかく言うことは意識の遅れたる労働者を直ちに革命家の組織にくり入れるのではなく、二人でも三人でも労働者の集合があるならば、その一人あるいは出来るならば全部を革命家としてきたえ上げ、われわれの援助と指導の下に彼らに革命家の組織をつくらしめ、そこから工場全体への働きかけがなされるべきであるということだ。

資本主義下において労働者農民はその生活窮乏のために、自然生長的に闘争を開始する。この自然生長の闘争は労働者農民の目を資本主義の矛盾に対して開かせるのである。この限りにおいて自然生長の闘争は、革命的闘争の萌芽であると言うことが出来る。しかし労働者農民の闘争が

自然生長性の領域にとどまっている限り、その闘争を革命的闘争に高めようと努力しない限り、労働者農民にその一時的利益だけを追求せしめて、彼らを階級的利益の水準にまで高めようと活動しない限りは、改良主義であり、組合主義である。

改良主義、組合主義、社会民主主義の指導者は労働者農民の階級的利益とブルジョアジーのそれとが一致し得るものであると説教し、彼らの大好きな題目たる産業の平和を説いてブルジョアジーに奉仕しているのである。ブルジョアジーと労働者農民との間には闘争以外に何物もあり得ないのである。それで自然生長的にさえ闘争をひき起こすのである。

無政府主義的闘争は一方には大衆の自然生長的闘争の波が盛り上がり、他方には「真理の探究」の結果、労働者農民の闘争に近づかんとして来た知識階級の最良の分子の結合によって起こって来たのであった。バクーニンも、クロボトキンもマラテスタも、大杉栄も知識階級の出身者なのである。それ故に無政府主義闘争はその基礎として自然生長的な大衆の闘争を持つとともに科学の発展がもたらした成果なのである。それ故にこそ自然生長性に屈服しないで、むしろ反対にこの自然生長的闘争を目的意識的闘争にまで高めようとするのである。われわれがすでに述べたごとく複雑なる条件の下に正しい方向を見出して闘う革命的闘争を戦い抜き得るのは確乎たる理論を持たねばならないのである。

自然生長的闘争は主として日常の生活条件の改善のための闘争であり、経済闘争である。この経済闘争を最も良く闘い得るためにはその反映たる政治闘争を闘わねばならぬ。そして政治闘争はただ、経済闘争の基礎の上にのみ強力に闘い得るのである。それなくしては単なる空虚な饒舌

にとどまるであろう。われわれが始めなければならないことは自然生長的闘争を目的意識的闘争にまで、経済闘争を政治闘争にまで高めることである。このためには、われわれ自身、大衆の自然生長的闘争を拒否することなく、むしろ反対に自然生長的闘争のなかで、その先頭に立ってその方針を与えて、果敢に闘争すること以外には方法は絶無である。これなくしては目的意識的闘争を紙の上ではなく実践することは不可能である。自然生長的闘争と組織こそは大衆を革命的に教育し、訓練する最良の学校であり課程である。このために指導者の組織たる「革命家の組織」の必要はいうまでもなく明らかであろう。これなくしては大衆への改良主義的指導の影響と闘い得ないし、それを打ち破ることも不可能である。

だが資本主義の続く限り、改良主義の影響を全く根こそぎにすることは不可能である。これが可能なる時はわれわれが全大衆を一人残らず指導下に置き得た時のみである。しかるに金融資本はその膨大な利潤のうちから労働者農民の上層の部分を買収する金を支出することが出来るし、またしているのである。労働貴族や中小地主はその比較的良好な生活条件のためにならされ、ブルジョア意識を労働者農民の間へ浸潤せしめ彼らを改良主義の泥沼へ陥れ、階級的裏切を行なう。改良主義的指導者はかくして、社会ファシストに転落し反動的勢力を強化するのである。最近日本における社会民主主義者の右翼への転向はこのことを物語っている。

われわれは未だに、鉄のごとき規律を持った、系統的な統一的な全体としての組織を持っていないで、少数の私的なグループのみである。このグループの間にはただ道徳的な影響が互いに存在しているだけであって、決して労働者農民を全体として一つの瞬間における闘争に動員するこ

とは出来ないのである。そのためにまず確乎たる党を結成すべきなのである。

そのために何から着手すべきか？ われわれは意志の統一をつくりあげ全体的組織をつくりあげるために全国的規模における新聞を発行しなければならぬのである。

ブルジョアジーは学校、文化的組織、新聞、雑誌等々によって系統的に組織に宣伝煽動を行なうて、その周囲に大衆を結集して、自己の支配の支柱をつくり出しているのである。その方法は決して手工業的な一人一人の口から耳へという方法でなく、機械生産のような大量的な影響を組織しているのである。この組織的な宣伝煽動の網に対抗するためには、われわれもまた全国的な、組織された新聞紙を持たねばならないのである。

出版物の力を過小評価してはならない。労働者を鼓舞し得る第一歩は印刷された自己の姿を見ることによって始められるのである。この全国的に組織された新聞はあらゆる論争を活発に展開しつつ批判を尽くし、その結論を具体的一つの統一された意志として示すことが出来るのである。その上全国的新聞は地方的な闘争の経験を全国的な全体の問題として取りあげ、全体の経験として摂取し得ることが出来る。かくしてのみ部分は全体に結び付けられると同時に、全体を部分にまで浸透せしめ得るのである。

われわれがなお付加すべきことは「職業的革命家」についてである。われわれの党は職業的革命家によってのみ構成さるべきことの主張の根拠は次のごときである。

例えば工場における優秀なる組織者は当然敵の攻撃を集中される。彼が八時間、十時間、十二時間も自己の生活のために労働しなくてはならないならば、他の時間を党の仕事にさくだけであ

るならば、彼は充分自己の任務を遂行する事は出来ないのである。これほどに党の仕事は多量である。しかも優秀なる組織者はその理論と、その技術を自己の経験のみでなく、あらゆる階級の経験から摂取しなくてはならぬ。かくしてのみ優秀なる組織者となり得るのである。

そこで党は生活費の一部または全部を支給しなくてはならないのである。かくしてのみ職業的革命家はつくりあげられる。この問題はただわれわれが多く資金を獲得せんとする問題を解決せんと今直ちに活動を開始することによってのみなされ得るのである。資本制の下にあり、それと闘うためには多量の資金を必要とするし、それなくしては不可能である。資金はわれわれの弾丸である。

x x x

われわれはここで、テロリズムとゼネストについて言及することは必ずしも無駄ではあるまい。この二つの闘争方法は一般にアナキズムの戦術であるとされているからである。まずテロリズムから始めよう。われわれがテロリズムと言う時はロシアのニヒリストの活動が結び付けられている。フランス革命におけるジャコバン党のそれのごときを問題としてないのだ。ロシア的テロリズムはその果敢なる行動を持つにもかかわらず、破壊した社会の後にそれにかわるべき建設的行動綱領を欠いていたという点にその本質が存在した。ロシア的ニヒリストが敗退したのは、その果敢なるテロリズムの後に新しき社会の建設的行動を把握した党を持たなかったがため、それ故テロリズムは破壊工作に役立ったのみであった。日本における五・一五事件および血盟団事件も同様に行動綱領を持たなかった。

だがテロリズムは全体的見透しの下に行なわれるならば、それは大衆の間に何ものにもかえ難き支配階級に対する激甚なる憤激をひき起こし、大衆に自己の力の強大さを知らしめ得るのである。それはただ不断に用い得るまた用いるべき戦術ではなく、一つの遊撃的な役割を持つものである。公然とあるいは陰然と武装せる党の遊撃的活動としてのみテロリズムはその全効果をあげ得るのである。それ故テロリズムは決してアナキズムの唯一の戦術ではなく、その一部のある条件の下においてのみ戦術となるのだ。

次にゼネストの問題に移ろう。ゼネストは労働者は生産者であるから彼らが生産を停止することによって直ちにブルジョアを屈服せしめ得ると考えることにおいて多くの人々に推賞されている。だがゼネストによつて最初に餓える者は労働者であり、ブルジョアはその蓄積せる生産物によつて勝利の鍵を握っているのである。武力的闘争への準備を欠如していたイギリスの炭坑夫ゼネストは敗北した。われわれはゼネストに全然反対するものでない。ただ、その力を過大評価する労働組合主義者、サンジカリストに反対するのである。ゼネストはわれわれに武力的闘争の用意ある時のみそれが旧権力を倒し、収用を行ない得る時のみ社会革命への門戸を開き得るのである。それ故にゼネストもまた、われわれの唯一の戦術でなく、むしろこの点に關して思い誤られてゐるが故に修正をしなくてはならない。戦術とはただ、客観的な力的關係において決定される場所の屈伸性あるもののみ言い得るのだからである。

そこでわれわれの戦略戦術は決して固定したものでなく客観的情勢によつて変化するものである。戦略とは資本と労働との闘争において、その決定的闘争に至るまでのわれわれの本隊と予備

隊とを準備し、一定の瞬間にそれを決定的に結集するまでに至る方法を言い、戦術とは戦略に沿つて日常の個々の闘争を、その運動の満干に従い、あるいは進ましめ、あるいは退かしめるところの方法を言うのだ。それ故に戦術は戦略の一部なのである。ある時には党は公然と現われるであらうし、ある時は陰然とした勢力としてかくれるであらう。ある時には果敢な闘争が展開され、またある時は残された合法性のなかに、文化的諸運動のなかに退却するであらう。それらすべて客観的条件と敵とわれわれとの力的關係によつて決定される。

われわれの戦術が改良主義のそれと決定的に異なる点は、改良主義が一時的な勝利を目的としているのに反して、われわれは一時的勝利も一時的な敗北もすべて、より高き、より決定的勝利への一段階であるとする点にある。

それ故に改良主義者は資本主義の下における「改良」（それは妥協以外の何ものでもない）に満足するに反してわれわれは一時的な妥協のうちに、より広汎な、より決定的な闘争に勝利するためにわれわれの陣営の力を適当に配置し、われわれの力を蓄積するまでの休戦とみなすのである。

改良主義者はその妥協をもつて闘争の終局とするに反し、われわれは決定的闘争に至るまで、共産主義者が新しき新国家を創設するに反し、われわれは一切の権力を廃棄し、労働者農民並びに一切の被圧迫民衆の全的解決に邁進するものである。

〈注〉

- (1) クロポトキン 「近代科学」 六三頁
- (2) " 「フランス革命」
- (3) " 「近代科学」 六四頁
- (4) " 「 " 一二八頁
- (5) " 「国家論」 二八〇頁
- (6) " 「 " 〃
- (7) " 「近代科学」 一二八頁
- (8) " 「 " 〃
- (9) バクーニン 「神と国家」
- (10) クロポトキン 「近代科学」
- (11) マラテスタ 「マラテスタ論文集」
- (12) クロポトキン 「フランス革命」
- (13) " 「近代科学」 一二八頁
- (14) クラウゼヴィッツ 「戦争論」
- (15) " 「 " 〃